

Y.C.T.

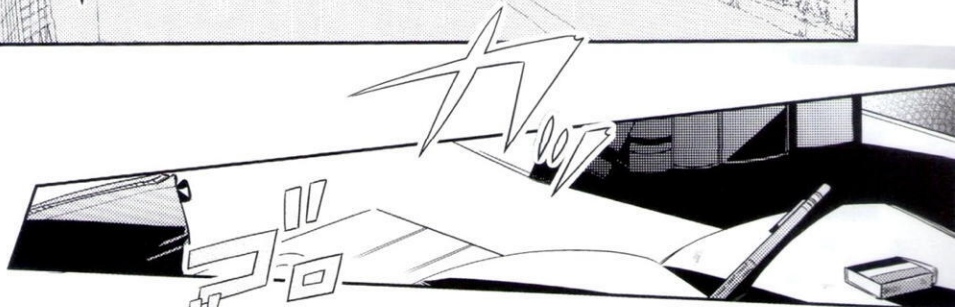


R18
adult only

HQ!!FANBOOK Sawamura*Sugawara

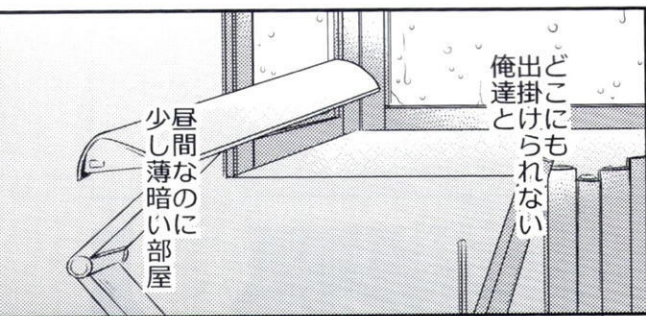
Y.C.T.

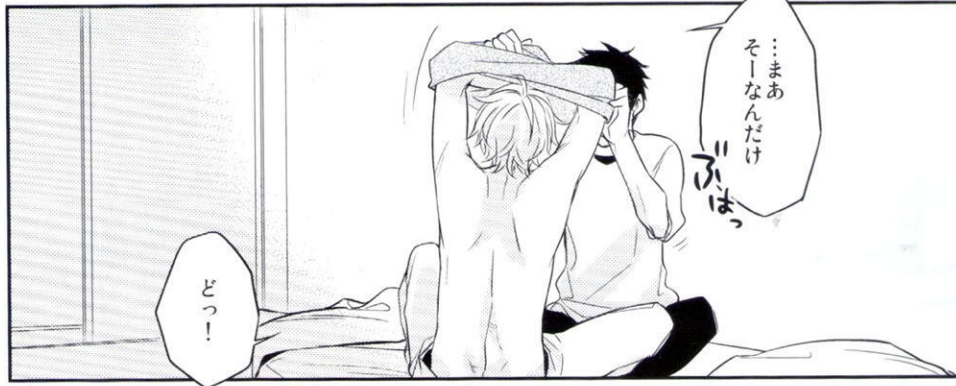
[YACCHAITAI]
HQ!! FANBOOK Sawamura*Sugawara
ポジグラス/2014



うっわすごい音
これ絶対
どっか落ちたべ

つか全然
止みそうにないし







普段は固く
閉じ込めている

わがままな

欲張りな



弱い自分を
抑えきれない

1/3



大地は悪く
ないんだけどさ



大地のせいで
俺すごく
だめになるー

結局
俺のせいだよ…

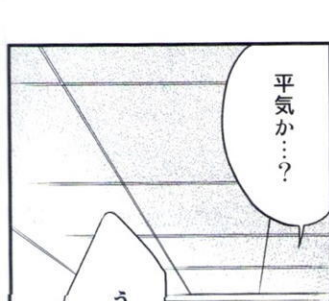
じい
じい



…頼むから



そういうことに
しどいて



平気か…?



お前なあ…

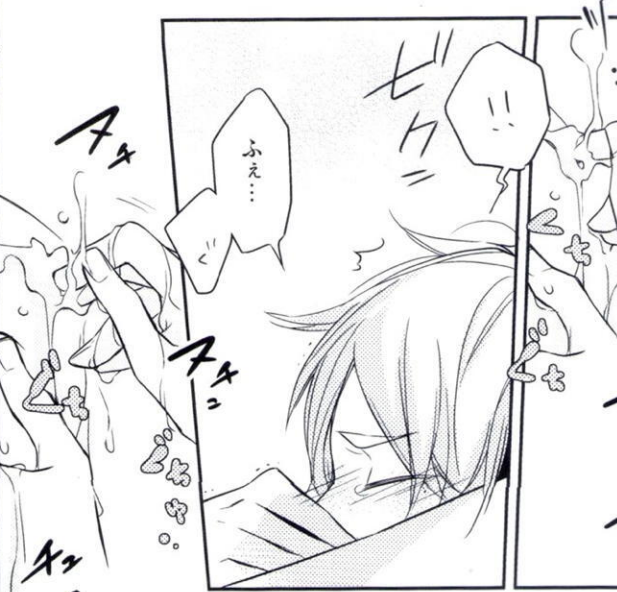


う…

んっ

まあ…
う…ひゃ…

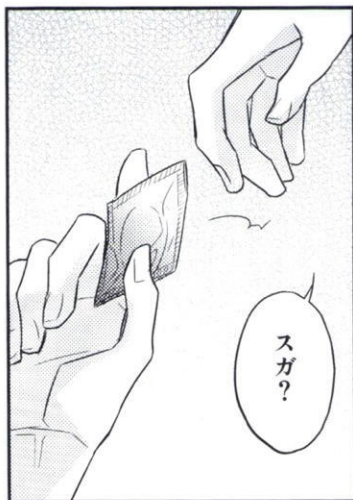
ハハ



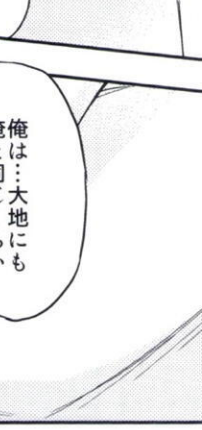
ふえ…

アッ
ハハ







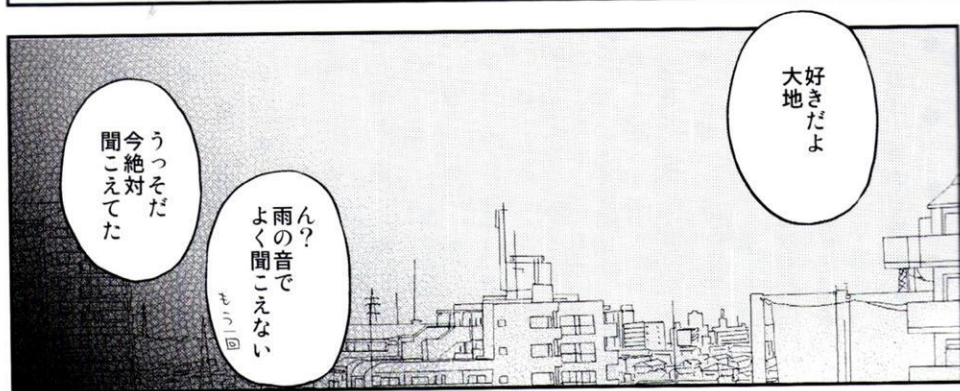




そんなの
とっくになってる

小さな世界に
閉じこもって

雨宿りする
鳥のように



好きだよ
大地

うっそだ
今絶対
聞こえてた

ん？
雨の音で
よく聞こえない
まじっか一回

そして

ひたすら体を
委ね合うんだ

「菅原孝文」

高い気温、日差し、人混みとどこかで見たような風景、建物、嗅ぎ慣れない空気、耳慣れない街頭の音、声。目的地までの経路だけは頭に入っていると思っていたのに、それを実行するための手段を見つけたことがこんなにも大変だとは思わなかった。

「あちー」

独り言を言っただけ空を見上げる。この空はどこまでも繋がって、とか何かで耳にしたような気がするけれど。

空の色は同じかもしれない。それでも地元のと違う場所なんだなということを確認するだけだと思った。

既に帰りたいと思っている自分がある。それかせめて。

「大地はどうしたかな」

まだ分かれてそれほど経っていないのに、大地と早く合流したいと思った。もしもそういう関係じゃなかったとしてもそう思うだろう。そういう、のなんだから余計に思うような気がした。思ってもいいような気がした。

夏休み、俺たちは部活の休みを利用してオープンキャンパスに参加するために上京してきた。大学のオープンキャンパスの日程を調べたら、今日は俺と大地は別の大学の、明日は同じ大学のそれが行われているとわかったからだ。

大地と新幹線到着駅で分かれてから、今日が同じ大学の、だったよかったのと思うこと数回。

別に上京するのが初めてだったわけじゃなくても、それほど

慣れない場所であらうろろするというのは結構。

「・・・疲れたな」

駅構内に入ってからどの電車に乗ればいいのか迷っているうちに、目の前の電車が発車して、気づけばすぐに次のが来る。便利だなど思う反面、目まぐるしく流れていく人波に置いていかれるような感覚があつてどこか。

「こつち来たたら一人暮らしか」

まだ合格もしたわけじゃないのに先のことばかり考える自分を振りきって、俺は滑り込んできた電車に乗り込むと今日のカリキュラムを思い出すことに専念した。

「疲れたー」

大地と合流したのは夕方、ファーストフードの店に入るかファミレスにするか迷った挙げ句、たまたま目に付いたファミレスに足を踏み入れた。少しききすぎているような冷房も、今は熱を持った体に有り難いくらいだ。

「大地、疲れたー」

俺はたまたま隣の席に案内されたのをいいことに、テーブルに突っ伏して大地に弱音を吐きだしていた。

「わかったって」

なのに、大地はアイスカフェオレに口を付けながら苦笑いを含ませて俺をあしらう。部活の方が何倍も疲れるだろうに、と大地が言うのはその通りなのだろうけれど。それとは違う疲労

が自分の中に蓄積されているのがわかって。

「なんだよ、大地は一人で疲れなんか忘れるほど楽しんでたのかよ」

なんて当てこすりをしたくなるのも仕方ないと思いたい。

「そういうんじゃないって」

顔を上げなくても、大地が仕方ないな、という表情をしているのはわかった。わかってはいるから。

「あーあーあー」

大地に聞こえるだけの大きさを呻いて、大地を困らせようとする。

「スーガー」

大地の手が、俺の後頭部に乗った。撫でる、と言うよりは押さえ込むみたいなその手のひらが、その重さが何故か俺の涙腺を緩ませる。ダメだ、と思う。こんなところで俺は。どうしてこんな、と思いながら仕方がないので下唇の内側を噛みしめて何かがこぼれてきそうになるのを止めた。

なんとか止まったそれに息を吐き出して、俺は同時に。

「だいちー」

心細かった。とこぼす。俺の声はまるでテーブルに吸い込まれるみたいに小さかったと思う。それでも。

「そ、いうことを」

こういうとこで言うなよ。と大地が言いながら俺の頭から手を離れたので意味は伝わっているなと思った。

「じゃあいつ言うんだよ」

俺は顔を上げて。実際には顎はテーブルに着いた状態で目線を上げて言う。大地と目が合った。大地は目を逸らさずに。

「それは・・・」

と口ごもる。だから俺は。

「・・・ホテルで、とか？」

と口にすれば。

「っ・・・」

大地が動揺したみたいな顔をするから愉快になった。今日は駅に近い格安のホテルをツインで予約している。部屋の構造なんかネットで見た程度なのに、早くそこに行きたいと思った。思いながらも意地の悪い考えが浮かんでそれを口にす。

「知らない土地、知り合いのいない場所」

「？」

俺が続けた言葉に、大地は意味はわからないまま耳を傾けているのがわかった。俺は、完全に顔を起こすと、自分の口元に手を添えて大地に耳を向けるように促す。

「・・・あのさ」

「ん？」

完全に俺と大地の耳は接触していない。だから声が漏れるかもしれない、と少しだけ思った。思っただけ低い声で。

「ラブホ、とか入って見たかったな」

と言えば、大地の顔がぼっと離れた。

「スっ・・・」

いくら何でも動揺しすぎじゃないかと思った。同時に、動揺

するということの意味が少し見えてくる。

「大丈夫？大地」

「・・・大丈夫じゃ、ない」

大地は俺の方に待て、みたいに手のひらを掲げると、一呼吸置いた。

「ひと夏の経験、とか？」

考えなかったかと、俺が続ければ。

「・・・聞くな」

などと言う。

「考えたんだ」

自分の顔がにやけているのがわかった。それは、いやらしいことを考えていた大地に対する揶揄もあつただろうし、なんだろう、そういうことを共有することの不思議な連帯感に頬が緩んだような気もした。

「言うなよ」

大地は困ったと言うよりは、どこか怒ったような声で言う。

それが照れ隠しの部類であることを知っているので俺は怯まな
い。

むくむくとわき上がってきたものそのままに頭にはっと浮かんだことを口にするのを迷ったりはしなかった。

「じゃあさ」

口を開いた俺に、大地が瞬間的に嫌な予感がする、というよ
うな表情をした。

往々にして、その予感は正しい。

「澤村大地」

オープンキャンパスに行かないかと言いだしたのは俺だった。実際に見もしない大学を受けることなど普通のことかもしれない。それでも少しその雰囲気や場所を感じてみたいと思つたからだ。

バレーに全力を尽くす。それとは別に勉強にも手を抜かないと決めたことへの延長線上にある行動だ、と思う。思う反面、スガと二人で上京することへの何か後ろめたさももちろんあつて、スガとそういう時間を過ごしたいだけなんじゃないかと自問すること数回。それでも進路決定上大切なことだと自分を納得させて来た、と思っていたわけだけだ。

迷い込んだ、というか一応お互いの意志で入り込んだその場所であつた。どこか途方に暮れていた。

今は、本当に便利で調べようと思つたことはすぐに調べることができる。今日は主に。真面目にオープンキャンパス開催の目的地までの経路を調べるために使つたそれで、今この場所に辿り着いていること。

当たり前前だけど、こういう場所は初めてだ。多分、スガも初めてだと思ふ。男同士でも大丈夫、とかほぼ人に会うことはない、とかの条件をクリアしたこの場所で俺たちは目的の行動に衝動的になるよりもどちらかと言えば後込みしていた。

「・・・普通のホテルみたいだな」

誰にも会わずに部屋の中に入つてほつとした。別にすごくき

らざらした部屋じゃないのに、目的が決まっているのがわかるその作りに少し心拍数が上がった。

「そう、だな」

スガもなんとなく部屋の中をうかがっているのがわかる。これなら予約してるホテルでゆっくりしても同じだったんじゃないかと思う部分と、やっぱりなんとなく場所に飲み込まれるような空気に何か、感じないでもないと思う。

じわりじわりと自分の中の内圧が上がっていくのがわかる。密室で誰もいないのに俺たちは部屋に入って少しのところ立ち尽くしていた。シャワーでも浴びるかとか一緒に浴びるかとか、さらりと言えればいいのに声を出すのを躊躇って。躊躇っているうちにきつかけを失う。

不意に小さな声が耳に入った。どの程度防音がされているかなんてわからないけれど、明らかにそれは叫ぶように発せられた喘ぎだった。言葉の詳細はわからない。それでもそれは。

「っ・・・」

その声に反応するようにスガの肩が揺れた。俺は反射的にその体を正面から抱きしめる。

イイ、とかイっちゃやう、なんて微かに聞こえてきてそれをスガの声に転換してる自分に呆れた。今スガは腕の中にいるのに俺は腕に力を込めてスガの体を締め付けた。密着して汗の匂いが鼻を掠める。

どこかでそれに興奮する自分もわかってた。自覚すれば抑えることなんかできない。そもそもの目的が明確なんだから今更

というものだと思いたい。スガからの抵抗は全くなくて、それがまた同意の証みたいで膝の裏あたりがむずむずした。

欲情、って意味ならそれはもう明確にそこにあるわけだけ。腕の中で大人しいスガの、その感触に安堵している自分もいる。だから。

「今日、ずっとスガのこと考えてた」

なんて口にしてみる。スガが疲れた疲れたと繰り返して、その理由の一部に俺と一緒にいなかったからだとか含まされれば俺にだって感じるものがあった。

「周りに知らない人間しかいない、知らない場所で。夕方の待ち合わせの場所にスガがいて」

ほっとした。とスガの耳に吹き込んだ。そうしたら、スガの腕が俺の背中に回る。そして、ぎゅと締め付けてきて。

「・・・俺も」

似たようなもんだよ。と言うのでなんだか口元が緩んだ。

「そっか」

「そうだよ」

スガが小さく笑った。何となく地に着いてなかったものが、やっとなたりと足の裏に感じられたような気がした。

「あ・・・」

不意にスガが声を漏らす。

「ん？」

問いかける自分の声がどこか柔らかいこと自覚して、なんだか笑いたくなって。

「あ、した・・・遅れないようにしないと・・・」

とスガが言うに至っては、もう空気の流れが緩やかに変わっていくのを感じていた。

「そうだな」

同意する。そのままスガの頬に自分のそれを押しつけて擦りつけて顔の表面でスガの唇を探す。それはすぐに見つかった。

少しの距離を擦りあわせて唇を重ねる。

「んっ」

おそらくは意図してなかっただろうスガの声に、ぎゅっとなんが引き絞られるようだった。外気温の高さもこの室内では関係ない。なのにスガの唇は熱くて、多分自分も同じなんだろうと思つた。何度も何度も唇だけ重ねて。

「んっ・・・だいち」

スガが唇を開いた瞬間にその隙間に侵入する。スガの唾液の味と舌の感触に、この場所の目的を思い出した。それ以上でもそれ以下でもないこの場所ですることが当然であること、を。

頭の中がそれだけになる。今日やったことも明日の予定も小さな塵みたいになつて消し飛んだ。視界の隅にベッドがある。当然のことだ。頭の中で何かが焼き切れそうだと思つた。

それが理性ってやつなのかな、と思つている自分もいたはずなのに、ベッドにスガを押し倒した瞬間の記憶なんて一切無かつた。

「あつ・・・ちよ」

抱きしめて訳がわからなくなるくらいキスした。自分でもど

こか強引すぎることをわかつていてもそれを止める術がなくて。

「だ、いち・・・」

スガの声に少し我に返る。

「いたいつ、つて」

「あ、悪い」

スガをベッドに縫い止めるように両手首を押さえつけて、そこに力を込めている自分を認識して慌てて力を緩めた。

どこか傷めたりしてないだろうかと不安になる。それを確認するようにスガが両方の手首を回して。

「・・・ははっ」

と小さく笑つた。

「何笑つて・・・」

んだよ、と俺は自分のしたことを棚に上げて文句を言う。心配しているというのに、と自分の言い分だけを押しつけるようにして。そうしたら。

「すげえ・・・大地が余裕無い」

などとスガが言うので力が抜けた。

「そんなの」

当然だろ。と口にする。しながら自分がそわそわしているのがわかつた。それはつまり、続きをしたってことだったんだと思うのに。

「ラブホ効果すげえな」

何か色々あるし。なんてスガが言うのでちよっただけそちらに興味が移つた。なんだか部屋の中に自販機みたいなものがある

って、そういうものが売っている。正直に言うと言語で直視できなくて視界の隅に映ったのを記憶しているだけだ。

多分、直視できないというよりは興味深そうに見てしまふのをスガに見られるのが嫌だとか避けたかったんだと思う。なのに。

「・・・使ってみる？」

と口にしてはいる自分に呆れた。正直そこまで手を出してしまつていいんだろかという葛藤と興味の狭間でぎゅ、と押しつぶされて、使ってみたいという部分の理由付けをスガに投げただけの話だ。スガは。

「あー今日はいい・・・」

と小さく呟いた。

「今日じゃなかったらいいんだ」

と続ける俺も意地が悪いと思う。

「・・・」

スガの沈黙は、本当は大地が興味あるんだろうと言っているようだった。ただ、それは俺の憶測なのでただ単に自分の中の深層が浮き上がってきているだけなのかもしれないなかった。

「黙るなよ」

俺は誤魔化すようにそう言う。スガが、じゃあ使ってみようと言わなかったことに少しほっとしながら。

ああいうものに興味を持つようになったら色々、色々考える事態になっているということなんだろうかと少しだけぼんやり思った。

「菅原孝支」

多分、セックスの手順はいつもと同じだった。キスして触れて探って撫でて。なのにそのいつものそれに対する自分の振れ幅が違うような気がした。

早く早くと急かす自分の中の何かが行動を起すことを要求してくる。キスしてその唇が自分の上を滑っていくだけでもう我慢できなくなるような気がした。

「あ、あ、あ」

声が出る。さつき耳にした声なんかもう聞こえない。なのにどこかでこの近くで気持ちいいことをしている人間がいるってことに何故か煽られた。

いくとかイっちゃうとか、気持ちいいとかどこを舐めてほしいとか、どこをして欲しいとか。現実になんかそういうことを口にしてはいる人がいるんだとか口にしていいんだとかいうことに少し驚いたような気がする。

快感を口にすること。考えたらじわりと自分の中で何か滲んだような気がした。そういうことを口にして大地が引かないだろうかというのを考えない訳じゃない。ならば自分は？言われたらどうだろうと思つたら。

俺のなかを慣らそうと行き来する指に何度も呼吸が止まる。お互いを遮る衣服なんかとうに無く、俺は大地の方に手を伸ばした。俺の上で四つん這いのようにのし掛かっているその体を探つてそれを握る。

「っ・・・」

大地が息を詰めた。俺はその手を上下させるようにして手の中のを擦る。感触、形。確実に欲情を表しているそれ。

「だいち、いれたい」

俺の言葉に大地の返事はない。声にしたらなんだか我慢がきかなくなつたような気がした。

「いれたい、いれたいっ」

囁くように口にしながら、俺はそれを自分のなかに導くように腰を揺らめかせて自分でその縁に大地の先端をあてがった。

こんなにも求めてるんだから簡単にはいるだろうと思つたそれはなかなかうまくいかなくて主導権が大地に移る。

「あっ、やっ・・・やあっ」

その質量が自分を浸食してくる感覚、少し慣れて来たと思つていたそれがいつもとは違うものを纏つて俺に襲いかかつてきた。いれるだけ、で気持ちいいと思つた。

「イ・・・イっちゃ」

口走つてはつとした。そのまま下唇を噛めば、吐き出せなくなつた言葉が目元から別の形で溢れ出ていこうとする。俺はぎゅと目を瞑る。目を瞑つたからという訳じゃないのだろうけれど感覚が俺の中に押し寄せてくるような気がした。大地がまるで俺の中のそれを吐き出させようというみたいに緩く腰を動かす。その緩やかな動きにすら全てを持つていかれそうで。

「イク・・・イクっ」

声が、出た。大地とのそれに明確な快感を得るようになった

のは多分、まだ最近のことだと思う。前を触られれば当たり前に気持ちがよくても後ろを擦られる違和感と不快感が完全になく気持ちいい、なんてことが。

「んあっなっ」

本当は思つてなかつた。荒く息を吐き出して目を開けてみる。視界ははっきりとしない。視界の隅に、さつき大地が気にしてた自販機があつた。あんなの。興味があるとかがそういう前に少し怖いような気がした。そもそもが、大地と繋がることすら躊躇っていたのにあんな。あんなの。

「あっあっあっ」

口の中が温む。喉の奥が熱かつた。何かに煽られてる自分がいる。この場所とか大地の興味の先とか今気持ちいいってこととか。

「だ、めだっあっん」

キスを求めるように大地の首に手をかけて促せばそのまま唇が落ちてきて貪る。舐めてみれば唾液の味と汗と。舌を絡めるとか技巧的なことなんかわからないままとかく口の中を探る。なのに大地が引き剥がすように顔を離れた。ぐ、と腰を進められて変な声が出る。

「あ、ちがっ」

体が締めようとしてるのがわかつた。

「そこっ・・・」

嫌だ、と言う暇はなかつた。

「あああっ」

決るように突かれて自分の内壁が削れるんじゃないかとすら思う。ただそれが。

「ひ、あっ」

強い快感だったことが嫌だった。

「だいちっ・・・やだあっ」

俺が嫌がる、というか抵抗するのなんかお構いなしに大地が腰を振る。

「んっんっんっ・・・」

わかっている。これは快感を貪る行為だ。気持ちいいことならしてやりたいと思うし、して欲しいとも思う。それでも。

「あっ・・・そこ」

目の裏がチカチカするようなそれから逃げたいような気持ちも沸き上がってくる。でも、もっと、とも思う。

「はっ、あっああっ」

はーはーと浅く長く呼吸を繰り返した。自分の中のぐずぐずになった部分を大地が突き上げてなんだかそれだけしか感じる事ができない。

吐き出す、のとは別のそれが目の前にあった。出せば終わり、とは違うそれがび、と自分の体の芯を強く痺れさせて頭の先まで力が入る。そして脱力した。脱力しているのに体のどこかに力が入っているような感覚、それが自分の体が快感に浸っている感覚だったことが理解できても抵抗はできない。

「っも・・・」

ぐちゃぐちゃに。汗をかいてるな、と思った。緩く揺さぶら

れながら、大地がいったのかどうかはわからなくて。

「っあ・・・あ・・・」

自分の体が震えるのがわかった。

「あっ・・・」

緩やかに大地が俺のなかから出ていこうとしているのがわかった。体が泥のように重い。重いだけけれど。

「ぬ、かないで・・・」

俺は、大地の胸に手を当ててそう呟いていた。手のひらが汗で濡れる。大地の汗だ。ず、と手のひらを滑らせればべたりと濡れる。俺はそのまま。大地の上半身を押しした。

「んっ・・・」

もちろん抜けないまま、というわけにはいかななくて俺は仰向けに横たわった大地に跨ると、まだ完全に力を取り戻していない大地のそれに手を添えて擦り上げながら導くようにして。

「んあ・・・いつ」

いれた。

「スガ・・・」

大地が俺を見上げてくる。それは悪くないと思った。いやらしい顔で。期待した顔で。だから俺は大地の形を確かめるみたいに締めてみる。ずる、とした感覚に唇を舐める。大地が気持ちいいように、とか考える前に腰が揺れた。

「だいち、い？」

言いながら、口に行っていることの意味が違うと思う。俺がイイ、んだ。

「んっんっんっ」

揺らす、揺する。感覚のまま、求めるままにそれをしていくはずなのにどこか違和感がある足りないと思う。気持ちいい自分がそうであるようにしているはずなのに、その不足分の理由がわからなくて俺は大地の顔をちらりと見た。多分目が合ったと思う。それで伝わったとは思わない。ただ大地の行動のタイミングが合っただけで。

「あつ、まつ」

大地が俺の腰を掴んだ。その意味はすぐにわかる。

「んんんんっ」

下から。揺さぶられて突き上げられて体が震えた。震えて揺れて自分でしたいようにしてたはずなのにその違いを思い知る。

「や、だ・・・」

「スガが乗って、きたんだろ」

大地は少し笑ったような気がした。その言葉が急に俺の羞恥心を煽る。か、と顔が熱くなった。そのままなのも悔しいので。

「俺が、する、の、にいつ」

となんとか吐き出したところで説得力はない。体が揺れる。腰が揺れる。快感の波が大きく小さく俺を揺さぶってくる。ただそれは、大地に主導権が移ってから大きくなるばかりで制御がきかない。

「ぐちゃぐちゃ」

音、する。大地がそう口にした。事実だけを口にしたのかもしれないし俺に対して何らかの意図があったのかもしれない。

俺は唇を舐めた。大地の言葉に思考が揺れたのは事実。もう痺れきったその場所でもともな言葉を出すことなんてできそうにない。だから。

「だいちが・・・」

「いっばい出すから。」と言う。

「スガ・・・」

大地が深く息を吐き出したような気がした。そのまま、ぐ、と腰を掴みなおしてそして。

「あー、ん」

呼吸をする暇なく突き上げてきた。

「んっんんっ」

目を睨れば視界は真っ暗なのにそこに何か散っているような気がする。目を開ければ大地の苦しそうな顔が目に入る。苦しそうに上気した顔、乱れた呼吸、流れる汗。全部全部苦悶に満ちているような気がするのにそれがいやらしく見えるんだからもう、ダメだと思う。

「くち」

俺は腰にある大地の手に自分の手を重ねて、なんとか言葉を出す。大地が気づいて動きを緩めたので、俺はそのまま上体を倒して大地の顔の横に手をつく唇を近づけて。キスした。べろりと舐めて数回唇を重ねて。

「だいちのくち」

おいしい。

と言って離したら大地がもう一度俺の唇に食いついた。

「澤村大地」

いったばかりなのに自分からのしかかって来て自分でいれて、腰振ってキスしてきて。おいしい、なんて言ってくるスガにどこだかわからない場所が苦しくなった。呼吸しにくくなったから胸のあたりだったのかもしれない。

同時に滅茶苦茶したいと思う。具体的にどうすればそうなのか説明できないほどにぐちゃぐちゃに。思考なんてしたって衝動だけが先走って意味を成さない。だから今はとにかくキスをした。

スガの唇がいつもより柔らかいような気がした。濡れているからかもしれないと思う。吸えばそのまま飲み込めそうな気がすらしした。

「んんんっ」

スガの口の端から漏れてくる声に。おいしいって言うならもつと。

「舌、出して」

食い尽くせばいいと思った。俺のことを。スガから素直に差し出された舌に吸い付けば、お返しのように同じことをされた。嘔んで舐めて吸う。その繰り返しの応酬。

「ん」

スガに食われる。下品な言い方をすれば、上も下も。食い締めて嘔みしめて食欲に食いたいというのがわかるその行動に、俺は自分の体が痺むような気持ちだった。痺んで引いて迫われ

て。

「あつ、ふ、あ」

追ってきたところを頭から。がぶり、と。スガの口から漏れてくる吐息と共にその唾液を飲み込んだ。押し付けて押し倒して衝動のままに。体を起こしたいと。

「だいち、手・・・ここ」

なのに俺がそんなことを考えてるなんて思っていないのかスガは。唇を離して少し上体を起こし俺の手を取ると、自分の前に押しつけた。俺に跨っているスガの。当然、まだ後ろは繋がったままだ。

「スガ・・・」

俺の声に反応してか表情にどこか恥ずかしさを滲ませながら。きもちいいとこ、さわって。などと言う。

「・・・なんか、だめだ」

スガはどこかぼんやりとそう言った。

明日ちゃんと行けるかな。

現実感ない。ないからいっそ。

このことだけ考えて。

自棄になるのとは違うから。

俺の手に自分のを押し付けるようにしながら言い訳のように言葉を並べ立てて言う。俺の手のひらはぐちゃぐちゃに濡れた。スガの言葉の端々に快感の訴えがあった。明確に言葉にしていなくても滲み出てきて俺を耳から浸食していく。

「んんんっ」

スガは背筋を伸ばすと、何かを確かめるように緩く腰を動かした。

「はいってる」

「だいの。」

「おれのなか」

「おれの。」

快感の源の確認作業のようにスガが言う。俺を見ているのに見えないような気がした。それはわざと焦点をずらしているのか合わないのかわからない。ただ。

「んんんっ」

言って体を震わせたスガに。俺の呼吸数と心拍数が上がる。

唇を舐めて俺は口を開いた。

「自分で言って」

自分で感じてるとか。

「やらしい」

今すぐにでももつと突き上げて、揺らして乱したいと思った。そうしなかったのは多分理性なんかじゃなくてどこかで現実感が無いとでも感じたのかもしれない。俺の言葉は感嘆で、頭で考えるよりも先に言葉が出た。呼吸だけが自分の中の欲情を表している。俺の声を耳にしたスガもおそらくは曖昧な感覚の中にあつたんだろう。いやらしい声で。

「知らなかった？」

と小さく笑うように言った。

「知らなかった」

「と云えば。」

「いっぱい」

「だいちが触らないからだ、とか言うので。」

「俺のせいだよ・・・」

「一瞬だけ反省みたいなものをして、すぐに手にあるスガの、を握り込んだ。」

「そ、んんんっ」

「おそろくは返事をしようとしたんだろうスガの声が歪んだ。」

「どろどろ」

「何が、なんてことを言わなくてもスガが一番わかっているだろうと思う。」

「ぐちゃぐちゃだし・・・」

「ため息のように吐き出してスガは、ちゃんと帰れるかな、と続けた。」

「そんなの」

「立てなかったら俺が背負って行ってやるからと言えよスガは。」

「屈辱」

「と言った。そして。」

「もっかいしたら・・・泊まるほう戻って」

「いちやいちやしよう、などと言うので。」

「・・・触ってたらまた我慢できなくなるかもしれないからな」と口にしても。

望むところだと返されては、俺は続ける言葉を持っていない。



Y.C.T.

HQ!! SAWAMURA Daichi*SUGAWARA Koushi

発行：ポジグラス

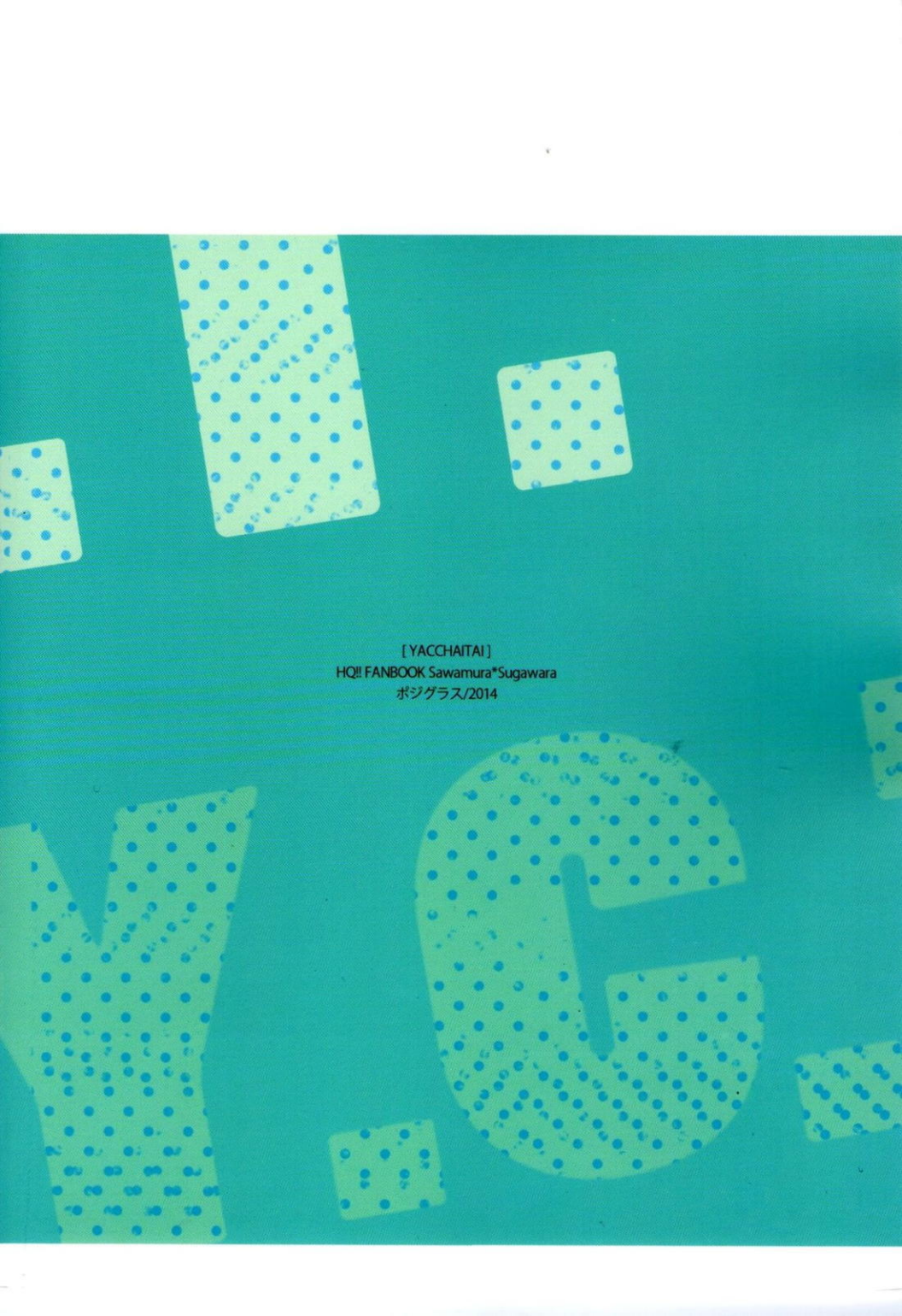
blog： <http://posiglass.blog.fc2.com/>

comic：箕和エリコ (mcd@pandora.nu)

novel：里見しの (irowoyomu2007@yahoo.co.jp)

発行日：2014年8月16日 / 印刷：K9 様

- ネットオークションへの出品、及び無断転載・複製はおやめください -

The background is a solid teal color with a fine, woven texture. Scattered across the page are several white rectangular shapes of various sizes, each filled with a pattern of small blue dots. In the lower half of the image, there are two large, stylized letters: a 'Y' on the left and a 'G' on the right. Both letters are filled with the same white background and blue polka-dot pattern as the smaller shapes. The overall aesthetic is clean and modern.

[YACCHAITAI]
HQ!! FANBOOK Sawamura*Sugawara
ポジグラス/2014